

Title	ビルマ所伝「ダブパティ(ジャンブパティ)王の事跡」 : 翻訳と問題の所在
Author(s)	原田, 正美
Citation	大阪大学世界言語研究センター論集. 1 P.227-P.246
Issue Date	2009-03-11
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/6210
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ビルマ所伝「ザブパティ(ジャンブパティ)王の事跡」 — 翻訳と問題の所在 —

原 田 正 美
HARADA Masami

The Burmese “Story of King Jambupati”: Japanese Translation and Problems

Keywords : Burmese Buddhist prose, Jambupati, Crowned Buddha, Zimme Paṇṇāsa, Paṇṇāsa Jataka

キーワード : ビルマ語仏教散文, ザブパティ(ジャンブパティ), 宝冠仏, ジンメーパンナータ, パンニャーサジャータカ

はじめに

本稿は、ビルマに伝えられている「ザブパティ(ジャンブパティ)王の事跡」の翻訳と、それについてビルマ国内での言及を紹介することで、その意義、問題の所在を整理することを目的としている。

この事跡もしくは物語は、威力を誇示する王が、諸王の王として王の姿をとって現れた仏陀の前に、改心し阿羅漢となるというストーリーである。

それはビルマにおいて、学術的に二つの文脈で取り上げられているといえる。一つが、宝冠仏という王様の姿をした仏陀像、すなわち仏教美術に関連付けてであり、今一つが、東南アジア固有のジャータカであるビルマ版ジンメーパンナータ(チェンマイ 50 話, Zimme Pannatha[P] Paṇṇāsa), 所謂パンニャーサジャータカ(ジャータカ 50 話, [P] Paṇṇāsa Jātaka) との関連である。

そこで、まずこの事跡の翻訳を試み、次にビルマにおける言及を、宝冠仏とジンメーとの関わりから整理し、事跡の意義、問題の所在を確認しておきたい。

1. ビルマ所伝「ザブパティ王の事跡」翻訳

ザブパティ王の事跡は、ディベイン尊師(Dibeyin Hsayadaw), 法名ティリタッダツマビリンガーラ(Thirithaddhammabilingara[P]Sirisaddhammābhilaṅkāla)師が、仏暦 2316 年, 緬暦 1134 年(西暦 1772)に著したビルマ語仏教散文『ターガタウダーナディーパーニー』(Tahtagataudanadīpani, 『如来自説義釈』[P]Tathagataudānadīpanī (1752))に所収されている。ここではそれを定本とし翻訳を試みる。

パーリ語によるこの文献名は、仏陀の出来事、仏陀に関する事象が明らかになるよう、

広範囲に渡りもれなく著した典籍を意味するという。実際分量は、他の著明な仏陀伝のほぼ二倍に相当する。ハンタワディ三蔵出版 (Hanthawaddy Pidakat Taik) から、一卷約 300 ページ、計五巻五冊が 1958 年に出版された。ザブパティ王の事跡は、第三巻全 311 話中 171 話として 40 から 70 頁まで所収され、配置の文脈は、成道後 45 年間の教法期のうち、仏陀が双神変を示され三十三天でアビダンマを説かれる第 7 雨安居に入られる前、ペインドーラ比丘の事跡の前、ケーマ王妃の事跡の後となっている。小見出しや話の番号はハンタワディ版において付加されたと思われるが、ここではそのまま使用する。『ターガタ』は、ビルマ語で表された仏陀伝の中でも初期のものと言えるが、後に著された他の仏陀伝にもこのザブパティ王の事跡は所収されていない。

なお、事跡のみ刊本となっている、著者不明『ザブパティ解脱の章、稀有なる事跡』(Zabupaticuthkan, wuthtu hsan) 1926、ゼーヤーブーレイ出版 (Zeyapurein sa ponhneit taik) と、仏法師アシン・イェウワタ (Dhammakatika Ashin Yewata) 著『ザブパティ王解脱の章』(Zabupatimin chuthkan) 出版年、出版社不明、も入手したので、それぞれを B 本、C 本とし、違いがある等の場合、必要に応じ注記することにする。三種とも結果として同一系統と思われるが、翻訳の際に参照した。

171 ザブパティ王の事跡を説くこと

王舎城に拠して托鉢を受けつつ竹林精舎でお過ごしの時、尊き仏陀はザブパティ (Zabupati, [P]Jambupati) 王が率いる一千の大臣たち及び、キンサナ (Kinsana, [P]Kañcana) 王妃が率いる一千の大臣の妻たちを解脱救済されました。その内容はというところ。

ピンサラ (Pinsala, [P] Pañcala) 国の都において、ザブパティ王が王として統治していた。その王が身ごもられていた時、王宮の境内に一八肘尺の深さの金が柱のように生え出た。誕生した時、大地から金の壺などが現れ出た。木々の先端から金の壺が降り、水からも現れた。ウエプッラ (wepulla, [P] Vepulla) 山の星宿宝 (manizawtiyatha, [P] manijotirasa) のルビーでできた一足の靴が王の足にかぶさった。「この王は、閻浮提を治めることになるであろう。上一由旬、下一由旬を所有するであろう。ナーガの都を治めるであろう。」と知れ渡った。「ルビーの靴を履いて、上空、一由旬の高さを飛翔するであろう。」と聞かれた。

ビンビサーラ王のもとに矢と靴を放ったこと

その王子が男子としての技能をなした時、矢で大地や、水、天空を射た。丸一六年技芸を修した王子は、一年で一由旬、二年で二由旬といった方法で、七年目には七由旬にとどくまで矢を放った。地中に放つと、一由旬貫通した。水に放つと、しぶきを跳ね一由旬水上を滑った。ナーガ国に放つと、粉殻の灰の如くになった。閻浮提に住まう百一人の王たちを配下として召集する時には、矢を使者として遣わし、百一人の王の耳に矢を通すが如くに至り、矢の威力により執り行った。

キンサナ王妃とともにピンサラ国で皇帝の灌頂を受け、一か月後のダザウンモン月満月の布薩日に、広い屋外に佇み、多くの星で囲まれている満月を見て、「わしの畏怖堂々とした様は、満月のようだ。百一人の王をはじめとする従者は星のようだ。」と考えて、宵に五種の神器で身を飾り、ルビーの靴を履いて、靴の威力で空を飛翔し、百一人の王たちのもとに巡回したところ、王たちはそれを見て、供養礼拝、[その後宮中に]戻った。その時、王舎城にあるピンビサーラ王の宮殿の重閣を見て、「この屋敷は高さも聳え、飾りの尖塔も多い。誰がここを統治しているのか」と怒りが生じ、尖塔を靴で蹴った。

[ピンビサーラ王は] 仏陀の優婆塞であるので、仏陀の威徳によって靴は滑り、その尖塔でひざを打ち、血が流れるのを見て、極めて激しい怒りが生じた。短剣を抜いて、斬ろうとしても、仏陀の威徳により、鉄製の尖塔が作り出され、短剣は壊れた。その王は激昂し、「よかろう、みておるがよい。わしの王宮に戻って、毒に漬けた矢を放ち、その人間の耳を貫通し、わしのもとにつれて来させよう」と考え、自分の場所に戻り、大臣たちの前で、弓を伸ばして、激しい怒りに囚われながら、短剣を手に持ち飛翔した。

その王を見て、「国王よ、どうしてそのような行為をなさるのですか。私たちに対して怒っておられるのですか。」と大臣が尋ねた。すべての大臣は、獅子の咆哮を聞いたかのように怯え境内にひれ伏した。「おお、大臣たちよ、お前たちに対してわしは怒っているのではない。一人の人間に対して怒っているのだ。」と言って毒に漬けた矢を掌に乗せ、「おお、矢よ、お前は行って、この地から、南の方角に居する王の耳を貫通し、この地に連れ来たれ。」と言って放った。その矢は、空中を進み、ナーガを脅かすガルダのように、「ピンビサーラ王の頭を割るぞ。胸を裂くぞ。我は偉大なるザブパティ王の使者である。我前にいてはならない。」このように獅子のように唸りながら飛んで行った。

矢と靴を仏陀が阻止されたこと

ピンビサーラ王は夜が明けると、重閣の尖塔に大きな物音を聞きつけ、驚き怯え、日が昇ると、竹林精舎行き、仏陀に礼拝し、「威徳の大なる仏陀よ、夜に、重閣の尖塔で、威嚇する音を聞きました。どのようなのでしょうか。」と申し上げた。仏陀は、「尊き王よ、ザブパティ王が汝王に対し怒りを発し、ナーガの毒に漬けた矢を放って、汝王の耳を貫通し、自分の国に持ち運ぶであろう。」とお述べになった。国王は恐怖に打ち震え、「仏陀よ、どうしたらよいのでしょうか。」と申し上げた。「尊き王よ、案じるなかれ。」と[仏陀は]言われた。

そのようにお話になっている最中にも、「ピンビサーラ王の頭を割るぞ。ザブパティ王の威力だ。」と激しく叫んで、矢が届いた。その声を、国民がこぞって聞き、恐怖に慄いた。矢は王宮を見いだせず、白い傘蓋を破壊し、竹林精舎を目指してやってきた。その矢が来るのを仏陀が御覧になり、「尊き王よ、矢がやって来た」とおっしゃった。国王は矢を見て、「威徳の大なる仏陀よ。あなた様がわたしの依りどころです。」と頭を仏陀の足下につけて、うつぶせに伏した。その時人間に常に憐れみをたれる仏陀は、ある威力ある輪 (sek, [P])

cakka)¹をお作りになり、「ああ、尊き威力持つ輪よ、汝はわたしの威徳を背負った使者である。行ってその矢を射なさい。」と放たれた。仏陀の輪は空中に上がり、「ザブパティ王の使者の胸を割ろう。頭を裂こう。」と激しく叫んで、矢目指し行くと、その矢とあたった音は、雷鳴のように轟き、燃え盛る炎から立ち上る煙のように世界一帯に広まった。

矢は耐えられずに逃げ出すと、仏陀の作り出した輪²はその後を追ってきた。矢は、自分の居場所である金の鞘に収まって隠れた。その矢をサブパティ王が見ると、牙の折れた蛇のごとくであり、星宿宝のルビーの靴を持って、「汝は行って、ビンビサーラ王の足を縛り上げて、連れて来い」と今度は放った。ルビーの靴一足は、百の頭を持つ、一千万の肉垂を持つナーガ王の姿に化身して、地獄の火煙のような煙の中にこうこうと炎を放って、王舎城を目指して、「割るぞ、切断するぞ」と激しく唸りながら王宮に入ると、玉座の上に王の姿が見えないため、玉座を破壊し、竹林精舎へと向かってきた。仏陀は、そこにやって来た青年ナーガたちを見て、「尊き王よ、そこにやって来た二匹³のナーガは大王の敵である」と述べられると、[ビンビサーラ王は]大いに恐れて、胸を伏せた。

仏陀は、「大王よ、恐れるなかれ。」と仰せになり、一万の頭のある、十万の羽のある、巨大なガルダを作り出し、放った。そのガルダは空中を飛び、羽音は十万の雷鳴の如く、燃えている煙のごとくなり、「ナーガの頭を切断するぞ。割るぞ。お前たちはわしの餌食なり。」と威嚇してきて、ナーガたちを捕まえるという状況になった。そのナーガたちは大変恐れて、ガルダから逃げ、大地に潜り、自らの場所へと逃げ帰った。ザブパティ王は、逃げてきたナーガたちを見て、両の羽が切れた鳥のごとく、大いに不安になった。

ザブパティ王と帝釈天

仏陀はザブパティ王を御覧になると、阿羅漢果の因縁を見て、帝釈天をお呼びになり、「帝釈天よ、汝は行って、王の中の王 (yazadiyaza, [P]rājādhirājā) が呼ぶよう命じられたので来ました、と言ってザブパティ王を連れてくるように」と遣わされた。帝釈天は、ピンサラへ行って、ことごとく国を後光で輝かせ、王宮に入り大臣たちの前に立って、次のように呼んだ。「おお、ザブパティ王よ。汝は、ピンサラ国の都に依拠し安住するなかれ。諸王を治める王の王に、何ゆえ贈り物を捧げに来ないのか。ああ、田舎者の王よ、森にいる鹿の如く、王の王のもとへ、何ゆえ来もせず汝はいるのか。今、汝を、私が一緒に連れ行かねばならぬ。じっとしている場合ではない。急いでついて来い。」と言った。

その言葉を聞いて、ザブパティ王は動揺し、「この使者の姿は、大変立派だ。この使者ですら、わしらよりも威徳は偉大であろう。そうではあるが、使者にふさわしいなすべき義務を述べよう」と考えて、「ああ、青年よ、使者というものは、賢者でなければならない。

1 ビルマ語 set の関連する意味として、「輪、真円」、「権力、威力」、「武器としての円盤、回転円盤」、「帝釈天の金剛杵」がある。[大野 2000 : 150]

2 C 本, nimmitaset, [P] nimmitacakka

3 B 本, 七匹。

柔軟な心があり、穏やかな言葉を述べるようであればならない。合掌しゆっくりと言葉を発してから、使いの言葉を伝えるべきだ。お前は使者たちがなすべき義務を知らない」と言った。その時、帝釈天は言った。「大王よ。見識のある使者というものは、場所と時を心得る。ある王は従者が少ない。威徳が少ない。そのような王に対しては、礼拝も表敬も、なすべきではないということを知っている。汝は、森の偏狭に暮らし、威徳も少ないので、汝に対し、礼拝、敬意を私は示さない。」と行った。

ザブパティ王は怒りを発し、「閻浮提全域において、わしほどに、大いなる威徳の持ち主がどこにいるのか」と立ち上がって肘を曲げ腕を組み、[それから] 毒に漬けた矢を取って、使者の耳を射た。王の王の使者である帝釈天は、ある輪 (set, [P] cakka) を作り出し、矢を射た。輪は雷鳴のごとく、激しい音を立て、矢の行く手でぶつかった。矢は逃げ、茂みに入り隠れた。輪は[それを] 追いかけて、茂みを燃やした。矢は土に潜った。輪も土に潜り、追いかけた。矢は水に潜って逃げた。輪も水に潜り、水しぶきを立てた。矢は土に逃げた。輪は矢の逃げるところを追いかけて、土ぼこりを上げた。矢は空中に逃げた。輪も空中を追いかけた。矢は山へ逃げ入った。輪も矢の逃げるところを追いかけて、糠にした。矢は再び、王の鉢巻きに入った。輪も即座に追いかけて、鉢巻きに閃光を立たせた。王は鉢巻を解いて逃げた。矢に輪がぶち当たり、炎が立ち昇った。

その時、千人の大臣が立ち上がって逃げた。ピンサラ国全土が閃光と化した。人々は全員怖れ慄き、激しく泣きわめいた。ザブパティ王は帝釈天である使者を「この使者は大変粗暴だ。自分の主に権勢のあるときだけ、気の向くままにするばかりか、わしの国に火をつけた。」と行った。その時、「尊き王よ、汝が治める場所はない。なぜそのように言うのか。大王よ、[汝は] 汝の威徳を私に示し終えた。私の威徳を汝見るがよい。」と行った。「ああ、使者よ、汝の威徳を、わしはもう見た。汝の威徳を静めよ。」と行った。[そこで] 帝釈天は、「わかった」と輪を静めさせた。ザブパティ王は、心安らかでなく、次のように考えた。「わしは昔、閻浮提一体を、手中にある如くに治めた。今はといえば、治めているのは別の人間だ。」と胸中穏やかでなかった。使者は言った。

「おいでなさい、大王よ。行きましょう。」と。「使者よ、わしはついては行かぬ。お前の主人をわしが統治する。お前は行くが良い。」といった。使者も、「国王よ、私の主人である王の中の王は、ケータラヤーザー (ketharayaza, [p]kesararājā) 獅子王のごとく、怒りを発しやすい。汝一人が来ないでいれば、全土が焼けてしまうだろう。この国はとても小さい。誰が見ることができよう。王よ、来るのだ。王の王のアバヤプラ (abayapura, [P] abhayapura) 国を見るがよい。」と行った。「使者よ、お前はそのように言うなかれ。わしは閻浮提一帯を統治せねばならない。何ゆえわしがついていかねばならぬのか。」と行った。「田舎者の王よ、ことごとくの閻浮提を、我主、王の王が統治している。時間伸ばしをするでない。劣った王よ、速やかに来い。もし来ないのであれば、汝は恥をかくことになるぞ。」と帝釈天が言って、輪を投げた。輪は王の足を縛って、立て、立てと言い、輪が王を引っぱると、宮廷の境内から落ちて、千人の大臣の前で、恥をかいたので、下に頭をうつむけていた。輪の威力で、王の鉢巻を引っ張り、[それを] 捨てた。[それは] 一

オッサバ(百四十肘尺)ほどのところに落ちた。輪の威力で、王を引っ張り、重閣から落とす。

大臣たちは、王の足、腕を持って奪い合った。鋭い輪で傷を負い、皮が破れて血が出た。その血を見て、大王は恐れて、「お前使者よ、一日ほど、待っておくれ。兵士家来を集めて、明日の朝早く、王の御足下へとつき従おう。」と懇願した。その時、「大王よ、承知した。私は先に行きましょう。明日になれば、早々に来て、我主、大王のもとに到着するように。到着せずに、私が再びここに戻ってきた時には、私の輪は、王の足を切断するであろう。」と帝釈天が言った。[そして] 仏陀にそのことを報告しに戻った。

ザブパティ王を解脱させるべく予め計画したこと

仏陀も、「この時期は多くの人々が向果を得る時期である」と御覧になり、「多くの神々、この場所に來たれ」と請願(dittanan, [P]dittāna)された。大地は激しく揺れ動いた。カーラヤーザナーガ(kalayazanaga, [P]kālarājānāga)の王たちにも、「ナーガの王よ、息子や妻たちと共に來たれ」とお呼びになったので、ナーガの王は来て、「仏陀よ、何ゆえお呼びになったのですか」と申し上げた。「ナーガの王よ、いずれかの方法でザブパティ王はやって来るであろう。その旅程に、汝は大なるガンジス河を作り出し、ナーガの娘たちに、自分の姿を捨てさせ、天女の姿に変えて、ガンジスで、7種の宝石の市を立て、売買をさせなさい。ナーガ王妃、ウィマラ(Wimala, [P]Vimāla)王妃を、売り子の長にしなさい。汝ナーガ王も、千を下らぬナーガの青年たちを呼び、人間に化身させ、買わせるのだ。」と命じた。カーラヤーザナーガ王は、「承知しました」と承諾して、ナーガ国から、七種の宝石を持ってこさせ、しかじかの場所に市を立て、売り買いをした。

ガルダの王も、息子と妻たちと共に来て、仰せを賜り、「ガルダ王よ、汝は、多数のガルダたちと共に、人間の姿になって、鍛冶屋、金銀細工職人の仕事をなせ」とお命じになったので、ガルダ王は、仏陀のご命令を頭上に掲げ、一千万を下らぬガルダと共に来て、その王が来る旅程において、鍛冶屋の仕事、金銀細工の仕事をした。

六牙(hsaddan, [P]chaddana)の類から、八万の象たちがやって来て、めでたい象が置かれる場所に位置した。ワラハカ(walahaka, [P]vālahaka)馬の類から、八万の馬がやって来て、めでたい馬の置かれる場所に位置した。八万の迦陵頻伽(karaweik, [P]karavika)鳥たちがやって来て、のどかな声で鳴いた。おおむ(小鳥)たちは皆、白壇を運んできた。雄のキンナラー、雌のキンナリーたちがやって来た。乾達婆(gandhabba, [P]catumharaja)たちがやって来て、神々の、太鼓、琴、笙などを演奏した。四王天(satumahari, [P]catumhārāja)である四天は、自分たちの家来と共にやって来て、四方で待機した。

仏陀は、竹林精舎で、八万四千の黄金の重閣を作り出し、それぞれの館に、十万、十萬ずつの弟子たちは、梵天王の姿のごとく化身し居した。それらの重閣の真ん中に、千を下らぬ、扉、柱のある、百重の巨大な館をお作りになった。金の唐草模様や網細工でできた、脅威の白い傘蓋を、その館に仏陀はお作りになられた。白い傘蓋の下に、七種の宝石で飾られた王の玉座を作り出し、特別なる色柄に輝く梵天王(mahabyama, [P]

mahābrahmā) の姿の如くに作り出して、[そこで] 仏陀がお過ごしになった。

尊き姿をした二人の天女たちを作り出し、左右に位置させた。大梵天は白い傘蓋を差さねばならなかった。仏陀のうしろには、十万をくだらない、乾達婆天たちが、多くの太鼓、琴、笙、を奏でた。十万をくだらない乾達婆の天女たちが、踊り歌った。その後、ヤフラ (yahula, [P] rahulā) 尊者は転輪聖王のように化身して、多くの家来とともにいた。マハーカピナ (mahakappina, [P] mahākappina) 長老は、転輪聖王のように家来とともにいた。それから、一万六千の弟子たちが、小さい土候国の王のように居していた。太陽神、月神たちは、門番の姿をした。参道の階段の下で、空中を行き来する天女たちが機織りをした。

扉の内側の床は、ガラスでできていた。八十肘尺の高さの金でできた扉に囲まれた。扉の入り口の通路の脇の両側には、十万の成長した牡象をつないだ。大地は金でできていた。外側を赤いルビーの扉で囲んだ。敷居の両側には、特別なる宝石でできた盾、楯、鎧、陣笠、刀、やりなどの武器と共に、十万を下らぬ兵士、勇者たちがいた。大地は、金剛石 (wazira, [P] vajira) でできていた。斑入りのルビーの扉で囲まれていた。両の扉の外には、十万をくだらぬ執事たちがいた。大地は赤銅でできていた。鉄の扉で囲まれていた。両の入口の扉の外に、十万を下らぬ兵士、勇者たちがいた。銅でできた大地を赤銅の扉が囲んだ。両の入口の外側に短刀を携えた十万を下らぬ兵士たちがいた。大地は白い銅でできていた。銀でできた兵が囲んだ。外にある両の入口の扉には多くの兵士がいた。

ターリポッター (thariputtara, [P] sāriputtarā) 尊者は、武将のようになって、十万を下らぬ家来と共に、右側にて諸事に当たり、モッガラン (mauggalan, [P] moggalāna) 尊者は、鎧かぶとを着て将軍になり、左側にて諸事に当たった。その兵の外には、梵天たちが金の鍛冶屋をしていた。その後、金の家の市が立った。その市に、トゥザーター (thuzata, [P] sujāta) が家来と共にいた。その後で、銀の家の市が立った。トゥダンマン (thudamma, [P] sudhamma) は、家来と共にその市にいた。その後、諸々の衣類で市を開いた。トゥセイタ (thuseita, [P] sucitta) は家来と共にその市にいた。その後、キンマの市を開いた。月の天女は、家来と共にその市にいて売った。その後飯の市を開いた。乾達婆天女は、家来と共にいて売った。その後、魚、牛肉、惣菜の市を開いた。その市で、雌のキンナリーが家来と共にその市にて売った。その後、ナーガの青年、ナーガの乙女たちが水をくむ動作をした。その後、壮園、池などが生じた。それほどまでのすべてを、仏陀はお作りになり、諸王よりも尊き王の姿をしておられた。

ザブパティ王が起こしになったこと

その時、ザブパティ王は、百一人の王たちと共に、十万の大臣を従えて、四種の武器を携え、ピンサラ城市を出て、「大地で行けばよいだろうか、空中を行けばよいだろうか」と考えて、「わしがもし空中で行ったとしよう。わしの威力は余り目立たない。大地を行くなら、わしの威力を大いに示すことができるだろう」と考えて、象に乗って行った。その王は道中考えた。もし王の王にわしが勝ったとしよう。月の神、太陽の神たちと白兵戦

を挑もう。王の王に、わしが負けた場合、百一人の王たちを、王の王にわしは差し出して帰ろう」と考えた。仏陀は、ザブパティ王が城市から出たのを見て、幼いマーガ沙弥(maga-thamane, [P] māgha-sāmaṇera)⁴を呼んで、「沙弥よ、汝は行って、ザブパティ王の来る百六十由旬を、汝の威力で短縮し、道程において、木の切り株、障害物、丘、溝の高低をなくし、一由旬だけ、平らな状態を作り出しなさい。」とお命じになると、マーガ沙弥は、仏陀のお命じになったとおりに作った。

ザブパティ王は、朝早く太陽が昇らないうちに作り出された道程を象に乗ってやって来た。仏陀は、「首尾よく使者を派遣しよう」とお考えになって、マーガ沙弥を呼んで、「沙弥よ、汝は行って、ザブパティ王が象に乗ってこないようにしなさい。足で歩いてこさせるのだ」と仰せになった。マーガ沙弥は、王の姿を作り出し、一瞬のうちに行って、ザブパティ王の前にたち、「王よ、象から降りなさい」と言った。王は怒って、「私の家来たち、捕まえるが良い。殺すが良い。」と言った。ことごとくの兵士たちが捕まえようとしてやって来た時、沙弥は威力で大地を揺らし、倒れさせた。多くの兵士たちが恐れをなして逃げ去った。幼い沙弥は恐ろしい姿を作り出し、象のしっぽを持って投げつけた。その王は激しくおののいて、地上を行った。大臣たちは、前を行った。百一人の王たちは、後からついて行った。ザブパティ王は、ルビーの靴を履いて、地上を行った。毒に漬けた矢を持って行った。

ザブパティ王が城市の外に到着したこと

ザブパティ王は川のそばに到着すると、宝や財を伴った千の黄金の船を見て、「この国には取るべき財宝が多くある」と考えながら進んだ。その後七種の宝石の市を見て、ナーガのウィマラ王妃が、「大王、この水を取って飲みなさい」と言った。王は、水を飲んで、「この水は、わしの国の水よりずっとうまい」と考えてまた進むと、金でできた城壁の小塔、堂塔の頂上が見えたので立ち止まって見た。「この国はわしの国よりずいぶん高貴な国であることよ」と考えて、更に進むと、サツダンの湖から来た八万の象を見た。「わしの象より、ずっと尊き象たちであることよ」と考えて更に進むと、八万のワラーハカ馬を見て、「この馬たちはわしの馬たちより高貴である」と言って、また進むと、迦陵頻伽の鳥たちが鳴いている声が聞こえ、「このさえずりは、わしの太鼓、豎琴、笙の音よりも、ずっとのどかであることよ。何と驚くべきこと。」とさえずりを聞いて、驚いていた。マーガ沙弥は、少年の姿でやって来て、「大王よ、立ち止まるなかれ。鳥たちの、太鼓、豎琴、笙の音を聴くでない。来なさい。早く来るのだ」と言った。その王は、素早く行くと、白壇の花を口にくわえてやって来た多くの小鳥たち(おおむたち)を見て、また進むと、踊り歌う雌のキンナリーたちが見えて、「これらのキンナリーたちはわしの王妃のキンサナ王妃よりも、美しい」と考えてまた更に進むと、乾達婆天たちの、太鼓、琴、笙の音が聞こえ、驚いて、また進むと、四方で待機している四大王天たちを見て、「この者たちが、王

4 B本、「沙弥の姿をした帝釈天マーガ」

の王であろう」と仰天して、座ろうとする動作をした。マーガ沙弥言った。「ザブパティ王よ、座るでない。王の王はこの先にいらっしゃる。更に行くのだ。これらのものたちは護衛にしか過ぎない。」と言った。

その言葉を聞いて、「護衛である彼らでさえ、これほどであるのなら、諸王より尊き王は、極めて高貴であろう」と考えて、更にまた進むと、壮園、湖などが見えた、更にまた進むと、水をくむナーガの乙女、ナーガの青年たちが見えた。また進むと、酒や惣菜の市にいたり、キンナリー、キンナラーたちが歌っていた。「ああ、大王よ、大臣たちと共に来て、この酒を持ってゆき飲むがいい。このおかずを食べなさい」と言った。その王は、それらの食べ物飲み物を見て、飲み食いしたくて、「この店(家の市)の女の長は、わしの王妃より美しい」と考えて、また更に行く、飯の市に至り、乾達婆天女たちが、「大王よ、大臣皆と共に来て、ご飯を食べなさい」と言った。乾達婆天女を見て、「この物売りの女の長は、キンサナ王妃よりも高貴だ」と考えて、また進むと、キンマの市に至り、月の女神が、「ああ、大王よ、大臣と共に来なさい。キンマ代を払いなさい。キンマも食べなさい。」と言った。

その王は、「このキンマ売りの女の長は、わしの王妃よりも美しい」と考えて、また進むと、花の市に至った。太陽の女神が言った。「大王よ、来なさい。花代を払って、花を飾りなさい」と言った。その大王も、その太陽の女神を見て、「この物売り娘の長は、美しい。わしのキンサナ王妃は、奴隷の女に過ぎない」と言って、また進むと、大小の果物市に今度は到着した。スナンダが言った。「ああ、大王よ、代金を支払って、大小の果物を食べなさい」と言った。大王は、スナンダを見て、恥じ入り恐れ入って進むと、パソアの市へと行き着き、「大王よ、来なさい。代金を払って、好きなパソアをおはきなさい」とトゥセイタが言った。その王は、トゥセイタを見て、執着の気持ちが起り、まっすぐに進まない。休み休み行くと、花の市に至った。トゥダンマが、呼んだ。「ああ、森の王、この銀の花を飾りなさい。」と言った。その王は、トゥダンマを見て、とても執着する気持ちが生じたので、口からキンマをうっかり吐き出した。

更にまた進むと、金の花の市に至った。トゥザーターが言った。「おお、貧しい王よ。来なさい。この金の花を飾りなさい」と言った。その王は、トゥザーターを見て、後ろに戻った。「大王、道のりをまっすぐ前に向かって進みなさい」とマーガ沙弥が言うので、また進むと、王は、あまりの恥ずかしさに、体から汗が出た。前に進むと、鍛冶屋、金銀細工をする場所に至った。大梵天は「ああ、悪しき王、来なさい。品物の売買をやりよう」と言った。その王は、大梵天を見ると、「この王は、王の王である」と、その佇まいを見た。「大王、先に進みなさい。この人間は金の鍛冶屋である」とマーガ沙弥が言うので、更にまた進むと、城市の扉に入った。

ザブパティ王が城市に入ったこと

左側のかたわらに、十万の兵士というモッガラン尊者を見て、投げ飛ばされるかのごとく思われた。右側のかたわらに十万の人間と一緒にいるターリーポッター尊者を見て、

両断されるかのように思われた。見終えると、白墨（白い土）の塀へはいつて、石黄、鶏冠石の土を踏みしめ、道中、短剣と鎧（盾）を手にした十万の勇者たちを見て、驚きおののいて見て、更に進むと、赤銅の塀に入り、赤銅でできた大地を踏み締め、堅固に組織された刀の武器を持つ、十万の兵士たちを見て、頭を切断しようとしているかのように思われ、恐れをなして進んで行くと、鉄の塀に入り、赤銅の土を踏んで、堅固に組織された、十万の槍の兵士を見て、今まさに突き刺そうとするかのごとく思われ、脇の方から進むと斑点ルビーの塀に入り、金剛石の大地をふみしめ、堅固に組織された十万のテインドーの馬を見て、仰天して、また進むと、エメラルドの塀に入り、ルビーの土を踏み締め、十万の勇者を見て、仰天して進むと、ガラスの塀に入り、金の土を踏み締め、十万の六牙象たちを見て、王は恐れおののいて更に進み、金の塀に入り、ガラスの土を踏んで、水と思い、踏み締める勇気がなく、立ち止まって、「大王よ、早く進みなさい。」とマーガ沙弥がいった。

水と思っていたのでパソーをまくりあげた。水が深く落ちてしまうことを恐れた。「大王よ、この地面は水ではない、ガラスの地面である。」とマーガ沙弥が言った。仏陀の聴衆たちを目にして立ち止まった。あまりの恥ずかしさに体から汗がで、再び進むと、機織りたちを見て、アーカータサーリー (akathasari, [P]ākāsacārī) という天女が言った。「山人、農耕の王よ、来なさい。綿糸のパソーをとりはずし、この私達の金糸のパソーを着なさい」と言った。ザブパティ王は、怒り、「汝らの王にわしが勝利し、王となった暁には、汝に対し、重大な王の処罰を与える」と言って、金の参道を上ると、扉のところで待っている太陽の神、月の神を見て、「これらの人物が、王の王であるな」と思い、大いに驚愕して、後ろに引き下がりがたかったのとどまった。マーガ沙弥はいった。「これらの人々は、門番にしか過ぎない。王の王ではまだない。」というので、更にまた進むと、小土候の王のごとき、一万六千の弟子たちを見て、激しく驚いて、「王の王であるな」と考えて、後ろへ退くような素振りをした。

「ザブパティ王よ、これらのものたちは王の王ではない。最後まで行きなさい」とマーガ沙弥が言った。ザブパティ王は、その一万六千の弟子たちの真ん中に行く勇気がなく、屈みながら行くと、転輪聖王のごときカピナ尊者を見て、「この人物が王の王であるか」と思って、驚愕して立ち止まった。「大王よ、この人間は、財の守護霊である」とマーガ沙弥が言うので、前へと更に入っていくと、転輪聖王のごときヤフラ尊者を見て、「この人こそまさしく王の王である」と恐れて後ろに引き下がった。「大王よ、この者も、王の王ではない。財務長官である。」と沙弥が言うので、また前へ出ると、梵天王のごときアヌルツダ尊者を見て、「この者こそ王の王であろう」と思って、ひざまづこうとした。「王の王ではまだない。更に入りなさい。この者は王宮の見張り番に過ぎない。」と言ったので、更に進むと、十万の梵天たちを目にして、これらの人々が王の王であるか」と考えた。

「大王よ、これらの人々も、王の王ではまだない。天の兵士たちである」というので、前に進むと、それらの天の兵士たちの真ん中で、鳥肌を立てながら更にまた進むと、あるものは、パソーを引っ張り、あるものは、肩を引っ張り、またあるものは、国の護衛であ

る王よ、我らの上を行くでない」と一斉に言った。ザブパティ王は、びっくり仰天したので、ひざまづいて進んだ。乾達婆の天女たちは、太鼓、琴、笙などを、以前よりも増やして演奏した。梵天たちは傘蓋を開いて、取り巻いた。頭上に、一かたまりに輝く、ケートゥマラーと言う、鏡の花を戴き、六種の光明を放ちながら、十万のルビーが煌々と輝く王の玉座におわします仏陀をザブパティ王は見ると、自分自身じっとしていることがいたたまれなくなり、「この方が王の王であられるのであるか」とマーガ沙弥に尋ねた。「ああ、大王よ、この宝玉の玉座にいらっしゃるお方が我々の主、王の王であられる」と沙弥が言った言葉を聞いて、虎を恐れる犬のように、大いに畏怖し、その場所にひれ伏した。百一人の王たちも、十万の大臣たちも、外側にとどまった。

ザブパティ王が仏陀と威力を競ったこと

稀有なる尊き慈悲の持ち主仏陀は、恐れ慄いている王を憐れんで、梵天の声に似たお声で、「ザブパティ王よ、汝、私のもとに来たれ」とお呼びになった。もし仏陀がはじめにお呼びにならなかったとしよう。ザブパティ王には、怯えた心があったため、その場にて破滅していたはずである。ザブパティ王はひびで這っていき、仏陀のもとに至り、安堵を得たため、仏陀を礼拝せずにいた。仏陀の声を聞いても、姿を見ても、「すべての王より尊き王は、声もまたいとも心地よい。姿も荘厳だ。家来も多い。わしよりも並みはずれて尊いとしても、その威力はわしほど偉大ではあるまい」とそのようにこの王は考えた。

その考えを知って、仏陀は、「私は声も心地よい。姿も他の者よりも荘厳だ。家来も多い。威力も汝より偉大である。何ゆえ汝はそのように考えるのであるか」と仰せになった。ザブパティ王はその言葉を聞いて、「この王の王は〔人の〕考えをも知っているのだなあ」と考えた。仏陀はその考えをお知りになり、「大王よ、この王の王は人の考えを知っているようである、となぜ言うのであるか」「私は、今の大王の考えだけでなく、最初来る時の汝の考えさえ知っている。どのように汝が考えたかという、『わしは空中の道を行くと良いだろうか、地上を足で行くのが良いだろうか、と想着て、空で行くと、わしの威力は目立たないだろう。地上で行くと、わしの威力は大いに目立つであろう』と想着て、『王の王がわしの威徳を見た時、わしの勝利が決定する。その時、太陽神、月神たちに、わしは戦いを挑もう。もし、王の王にわしが負けるとしよう。百と一人の王たちを、王の王にわしは与えよう』と想着て、来た、そうではないか」と仏陀が仰り、「大王よ、勝利するような威徳が汝にあるのであれば、それを私に披露しなさい」と仰せになったところ、「承知しました、大王様、わしの威徳を示し、大王が負ければ、どうなさいますか」と言った。

「ザブパティ王よ、もし汝が勝利したとしよう。汝を私は礼拝しよう。私が勝利したなら、私に汝は礼拝するか」と仏陀が仰せになると、「承知しました。尊き王よ」と言っ、ザブパティ王は立ち上がり、毒を塗った矢を取って、涼風の入る扉を射た。その矢が飛んできたとき、仏陀が作り出して放った金剛石の輪を見つけたために、矢は恐れをなし、再び沈んだ。その輪は、飛んできて、その矢を燃やした。その王は、そのように燃やすのを見て、右の上腕が切られたかのようになって、自分の聴衆と仏陀の聴衆の大勢いる中で、大

いに恥をかき、身体全体から汗が流れ、いたたまれない思いをしていた。仏陀は、「大王よ、恐れるなかれ。私の矢を取りなさい」と言われ、指くらいの大きさの矢をお作りになり、それをお与えになった。その矢をザブパティ王が取ると、須弥山を抱えるかのごとくになって、取ることができずにいた。

仏陀は、「ザブパティ王、汝に、他に威力があるのであれば、私に披露しなさい」と仰せになった。その時、おごり高ぶった気持ちのあるその王は、「わかりました、大王様」とルビーの靴をはくと、バルコニーの扉の方へ飛んで行った。仏陀は、ある輪を宇宙をもやすおおきな提灯のように作り出し、炎を立ち上がらせた。ザブパティ王は激しく恐れをなして、再び、仏陀のもとにひれ伏していた。仏陀は、ある金剛石の矢を立ち昇らせた。その矢は、宇宙の果てまで飛んでいき、再び戻って来て、ザブパティ王のルビーの靴を指して降りて来て、それを粉碎した。その時、ザブパティ王は、カラスの中にいるアオバヅク（フクロウ）、折られた牙のある蛇のようになって、すっかり意気消沈し、どんな糸口もつかめずにいた。ザブパティ王は、負けてしまったのに、仏陀を礼拝せずにいた。

ザブパティ王を地獄によって脅かしたこと

仏陀は「大王よ、最初に、戦いをする前に、負けたものは勝ったものに礼拝する、と約束をした。今、私は勝った。先になした約束通り、汝は私に礼拝しなさい。」と言われた。「大王様、大王様の土地ではそなた大王様の威力が偉大であり、私の地方では私の方が偉大である」とザブパティ王はまた言った。「ザブパティ王よ、汝の場所では、汝が偉大であるとするなら、先に私の使いのものが、汝の国へ訪れた。私の使者が、汝に勝った。私の使者の輪は、汝の足を縛った。汝は負けた。この国においても、今また負けた。」このように仏陀がお話しになると、ザブパティは言った。「王の王よ、国王陛下というものは、命を捨てるというなら捨てる、がしかし、他の王に礼拝はしない」と言った。

仏陀は、「大王よ、高潔な人というものは、命をも捨てない、約束の言葉を守るのだ。王というものは、良く調べ熟慮して行動すべきである。ある王が調べることもなく熟慮することもなしに高潔な一人の人のもとの、約束を守らず裏切ったとしよう。その王は、地獄に行くのである。ある王が、約束を守ったとしよう。その王は、天界へと赴くのである。ある王が知っていながら墮落した言葉を述べたとしよう。その王は、完全に地獄へと至るであろう」と述べられた。その言葉を聞いて、ザブパティ王は笑った。笑ってから、「王の王よ、地獄がどこにあるのか。ある人が善根功德をなした。悪行もなした。〔それにより〕その人間〔の業〕は静まる。このように私は知っている。地獄があるということを、わしは信じない。」このようにザブパティ王は言った。仏陀は「ザブパティよ、ある人が三宝の前で、知っていながら墮落した言葉を述べた。その人間は、墮落した存在として、地獄などに赴いて、虐げられるであろう」と言われた。

その言葉をザブパティ王が聞くと、激しく笑って、「大王様、地獄に行って、わしを仮に虐げたとしよう。わしは信じる。わしが嘘をつき、地獄に赴き、わしを虐げなければ、汝、大王こそ、大いなる虚偽となるであろう」とザブパティは言った。仏陀は、「ザブパティ、

汝の言葉をあらしめよ」と言われ、火偏 (tezawkathaing, [P]tejokasiṇa) 集中にお入りになり、威力によって地獄の火を落とさせた。地上には、火が燃え上がり、最初に、ありとあらゆる人々を越えて、ザブパティを目指して、煙が昇った。その王は、「わしはどのようなのだろうか」と下を見ると、地獄の炎の煙を見て、「わしに対して、悪しき罪が生じた。わしに対してのみ、地獄の火が昇ってくるのか」と考えて、鼻で、呼吸を吐くことも吸うこともできずに、「わしに対して煙が生じている。他人に対しては生じているのか」と見ると、満面に炎の燃え盛る地獄の火を見て、激しく恐れ、「大王様、火がついた、顔が燃えた」と叫んだ。

仏陀は、すべての家来と共に、姿をお隠しになった。地獄の炎が燃え盛り、王宮がごとく火に包まれたかのように思われた。ザブパティ王も、その王の家来たちも、激しく泣き叫んだ。「すべての王より尊い大王様。あなた様の尊きご恩を尊き頭上に乗せて、私たちは礼拝致します。火を燃やさないで下さい」と叫んだ。仏陀は、家来と共に体をお示しになり、火を静めた。ザブパティ王は、再び安堵して、「威徳の大なる大王様。閻浮提一体において、私のみが尊いのだということを覚えている。今、すべての王より高貴な大王様が、私たちよりも尊い。私は、王の王を礼拝致します」とザブパティ王は、頭に乘せた両の手で合唱し、仏陀に頭を下げ、五体投地により礼拝した。ザブパティ王が礼拝した時、その王の家来は皆、礼拝した。

仏陀は、ザブパティ王に対し、道を誤った人が道を見つけたかのごとく、「汝、大王は、向果を得るための理由 (因) を見つけたのである。」とこのようなことをはじめとして、多くの教えを説かれたが、ザブパティは気にいった様子もないので、[仏陀は]「大王よ、汝の城市は、どれほど、由旬があるのか」と尋ねられた。「六十由旬あります、大王様」と申し上げると、「何代の王がいたのか」と再び尋ねられた。「一億おりました」と申し上げると、そのすべての人々は、まだいるか」とまた尋ねられた。「いません」と申し上げると、「どこにいるのか」と尋ねられたので、「死んでしまいました」と申し上げると、「汝が得た、その諸王の、五種の神器は、まだあるか」と尋ねられるので、「まだあります」と申し上げると、「大王よ、そのように、汝が死ぬまでの間、汝のもとにその五種の神器は存在する。汝が死んだ時、その王の装飾品を捨てて、たった一人で行かねばならない。大王よ。すべての王たちは、死ぬ時、愛する息子、妻、財宝、象、馬を持って、行くものというてあるか」とお尋ねになった。

「大王様、持ち携えて行く人といっておりません。たった一人だけで行くのです。」と申し上げると、「王よ、おまえは、死なねばならないということを知らない。聞きなさい。」といわれて、「ミスナティンカローナッティ」([P]masankaronatthi) などの法をお説きになった。解かれた最後に、「すべての王よりも尊い大王様、あなた様は、ことごとくの人間が死ぬことを知っている。あなた様は、死には至らないのでしょうか。」と、サブパティが聞き返した。「大王よ、すべての人間が死んでしまうように、私も死なねばならない。」と仏陀が仰せになると、「大王様、あなたの言葉が本当であるにせよ、死んでしまったものたちはどこに生まれ変わるのでしょうか。王が死ねば、再び王となって生まれるのでし

ようか。バラモンが死ぬと、またバラモンとなって生まれ変わるのでしょようか。貧しいものが死ねばまた貧しいものとなって生まれ変わるのでしょようか。王の王よ、御存知でしょようか。」とまた申し上げた。「大王よ、私は知っている」と仰せになると、「威徳の偉大なる王の王よ、ことごとくの私の親戚たちはどこに生まれたのでしょようか。」と尋ねた。「ザブパティ王よ、教えを守った汝の親戚は、天界に生まれた。教えを守らなかった汝の親戚は、地獄へ赴いた。」と言われた。

「大王様、その地獄を見ることができなければ、私は信じることはできない」とザブパティが申し上げると、「大王よ、地獄で苦しんでいる汝の親類を見たとき、汝は、恐れるであろう」と仏陀は言われた。ザブパティ王は、「私は恐れない。大王よ。」と申し上げた。その時、仏陀は、地偏 (pathavikathain, [P]pathavikasīṇa) 集中を行い、第四禪にお入りになって、阿鼻地獄に至るまで、大地を分かち、火偏集中にお入りになって、地獄の炎を立ち上げらせ、「ザブパティ、汝は、自分の血縁を見るがよい。」といわれた。「王の王よ、炎が余りにも燃え盛っていて、血縁のものを見るができない」とザブパティが申し上げると、仏陀は燃え盛った炎を消して、ザブパティ王に見せて、「大王よ、この人間は汝の祖父である。この人間は汝の祖母である、この人間は汝の父親である、この人間は汝の母親である、これらの人間は汝の血縁者たちである」とお示しになった。

その地獄に落ちたものたちは、九由旬、八由旬の場所で寝なければならない。足の先から頭に至るまで、炎が燃え盛っている。その時地獄の使者たちが走ってきて、槍で突き刺した。短剣で頭を切断した。手斧で削った。激しく泣き叫んだ。その泣き叫ぶ声を聞いた。「大王よ、血縁たちが見えなかったのであれば、今見るがよい。汝大王は恐れないのか」と仏陀が言われた。「大王様、恐ろしいです。」とザブパティ王が申し上げたとき、仏陀は地獄を消しきった。

ザブパティ王を天界でおだてること

ザブパティ王は申し上げた。「大王様、どの行為をなしたために、有情の生物たちは地獄へ行かねばならなかったのですか」と申し上げた。「大王よ、世の中において、ある人々は、悪しき行為をなした。それらの人々は、地獄へと赴くのである。大王よ、ある人々は、四つの悪事をなし、殺生などをなした。母、父に対して過ちを犯した。教法でないものを信じた。それらの人々は、必ず、地獄へ行かねばならないのだ。」といわれたとき、「王の王よ、このことを私は理解した。一部の私の血縁のものたちは、天界へと赴くことができた、と、大王様は言われました。その血縁のものたちを見せて下さい。私は見たいのです。」と申し上げると、「大王よ、見るがいい」と、仏陀は言われ、四大王などの欲界の六欲天にいるその王の血縁である天たちをお示しになった。

一人の天には天女が千人使えていた。また一人の天には、十万の天女が使えていた。そうしたことなどをお示しになった。ザブパティ王は、その天、天女の重閣を見て、その重閣に執着、愛着を覚えたので、仏陀に申し上げた。「ことのほか威徳の大なる王の王よ、それらの天、天女たちは、どのような善き行いをなしたために、これらの重閣を手にした

のでしょうか」と申し上げた。「大王よ、ある天は、世において、王であった時に、僧院を建立し寄進した。またある天は、提灯、薬を寄進した。またある天は、金の重閣を造って寄進した。ある天は、仏像に帰命信仰した。ある天は、パゴダを崇めた。ある天は説法を聴聞した。ある天は寄進供養をした。水を寄進した。四種の品物を寄進した。宿坊を寄進した。橋を寄進した。家⁵を寄進した。僧侶の寝台を寄進した。そのような善き行いをなしたので、そのような汝の血縁者たちは、このような重閣を手にしたのだ」といわれた。その言葉をザブパティ王は聞いて、「王の王よ、閻浮提一帯において私は尊い。私よりもあなたの方がもっと尊い。あなた様より、この私の血縁の天たちがまだ尊い。私は、天の存在に、どのようにしてなることができますか」とザブパティ王は申し上げた。仏陀は、「大王よ、望むのであれば得られるであろう」といわれ、「ダナンタッガッタトパナン」([P] *dānasaggassasopāna*)などの教えをお説きになった。「ザブパティ王よ、寄進をすることは、天界への参道である。寄進をすることは、天界の扉を開く。寄進、善行は、ことごとくの望みをかなえてくれるものだ。転輪聖王のルビーのごとくである。寄進をすることは、豊穡の木のごとくである。寄進をしたので、天の幸福を得たのである。天にある、長寿、容姿の美しさ、家来が多いこと、などを手にしたのである。天にある歌や踊りで楽しむことができるのである。」

ザブパティ王に、涅槃をお示しになったこと

「この天において生じる幸福を、天たちは好むものである。望ましく思うものである。このすべての幸福は、永続しない。無常という性質をもっている。苦という性質をもっている。無我という性質をもっている。変化する性質をもっている。原因によって生じる。執着から逃れない性質をもっている。この幸福という欲望に依拠して、父親は息子を殺す。息子は父親を殺す。母親は娘を殺す。娘は母親を殺す。弟は妹を殺す。妹は弟を殺す。兄は弟を殺す。弟は兄を殺す。そのようなことで殺すので、ザブパティ王よ、この物質的欲望、煩惱の欲望は除かれるべきである。執着から無縁となるべきである。愛するべきではなく、好ましく思うべきでもない。」といわれると、「王の王よ、では何を愛するべきなのか」とザブパティ王は、尋ね申し上げた。

「ザブパティ王よ、涅槃を愛するべきである。涅槃を好ましく思うべきである。涅槃を心地よいと思うべきである。涅槃においてのみ、楽しむべきである」と仏陀は言われると、「あなた様、涅槃とはどのようなものでありますか」とまた尋ね申し上げた。「大王よ、涅槃とは、死というものがない。涅槃は永遠という性質を持つ。涅槃には、依着がない。涅槃とは尊き幸福のことである。大王よ、静寂の幸福とともにある者は幸福である。聞くべき、耳を傾けるべき教えのある瞑想を実践するものに、不安はないのであり、幸福である。涅槃は平穩である。その涅槃に対し、汝大王は、愛しさと好ましさを覚えるべきである。その涅槃において楽しむべきである。涅槃をこそ好みなさい。」といわれ、仏陀のお言葉

5 ビルマ語 *sayonein*, *ein* 家と訳した。

をザブパティ王は聞いて、その王の心は静まった。心が安定した。信仰心が生じた。「威徳の大なる大王様、あなたの教えに対し、五種の神器で恭敬致します」と供養した。そのザブパティ王とともに、百一人の王たちも大いに供養した。

「威徳殊の外大なる王の王よ、その涅槃を私はどのようにして手にすることができるのでしょうか」と申し上げた。「大王よ、その涅槃を汝大王は手にするであろう」と仰せになり、「この王に、私たちの出家の姿を知らせて、この王を出家させよう」とお考えになり、作り出されたすべての王の都の状態を消し、本来の竹林精舎をあらしめ、仏陀も、梵天王の姿を消し、本来の仏陀のお姿になられた。ザブパティ王は、三十二の相好で飾られた八十の小なる特徴と共に、煌煌ときらめき輝く最勝の莊嚴な竹まいで、丹念に樹液で染められた袈裟をまとい、ダザウンモン月の満月の誉れのごとく端正なお顔の仏陀のお姿を見て、「今まさに、人間の姿が消えた。出家の姿となった。何と、威力は偉大であるなあ。ああ、奇跡のごとくであるなあ」と思い至り、仏陀を見た。

ザブパティ王に対し四種のドンラバ(出家)についてお説きになったこと

仏陀は言われた。「ザブパティ王よ、あるものはヒマラヤ全体において、ある花で、命ある限り、千を下らぬ仏陀に対し御供えをした。その供養の利益は、一度出家をする利益とは異なる。そうしたことなどで、出家をする利益をお説きになられ、「大王よ、涅槃を実現させるために、サンガの宝といわれ出世間の衣服といわれる、樹液で染めた袈裟をまといなさい。出世間の道を進みなさい。汝大王は、死のない涅槃という国で暮らしなさい」といわれ、「大王よ、得がたいものは四種ある。

1. 仏陀と会うことは得がたい
2. 出家となることも得難い
3. 信仰に満ち満ちていることも得難い
4. 人間となることも得難い⁶

大王よ、汝は得難いものの四種のうち、私仏陀にも出会った、来なさい。私と共に死のない涅槃の国へ行こう」と言われた。ザブパティ王は、仏陀のお言葉を聞いて、すべてに王の君主であられる尊き方が、私に対して、友愛と尊敬の気持ちをおもちだ。私のために有益なことをなされた。私に対し、天の村涅槃の道を説かれた。私の国、私の富、私の命を受け取って頂こう」と考えて、「威徳崇高にして偉大なる仏陀、あなた様に、私の身体と、命と、ピンサラ王国を捧げます。私は仏陀の御許で、出家をいたします、私を出家させて下さい」と申し上げた。

6 C本には、以下のパーリ語四偈が挿入、ニッサヤ(パーリ・ビルマ逐語訳)の後、ビルマ語散文に翻訳。

1. appamādena bhikkhave sampādettha buddhuppādo dullabho evaṃ divasedivase ovadi
2. appamādena bhikkhave sampādettha pabbajjita bhāvo dullabho evaṃ divasedivase ovadi
3. appamādena bhikkhave sampādettha saddhāsampatti bhāvo dullabho evaṃ divasedivase ovadi
4. appamādena bhikkhave sampādettha manussatta bhāvo dullabho evaṃ divasedivase ovadi

ザブパティ王が出家となること

その時仏陀は一切種知の智慧によって、その王に、出家となる因縁があるかないかを熟慮されたところ、その王は、迦葉仏の時代に、商人の種族に生まれ、フェルトを売るため、ある地へ赴いたとき、托鉢にお巡りになっている仏陀にまみえ、自分のフェルトを敷物にして、迦葉仏に対し、「祈願がかなうように」と念じ、托鉢を差し上げた。手斧も一丁差し上げた。針も一本寄進した。このように功德をなし、「仏陀様、この功德で、私は阿羅漢になるまで、生まれ変わる生において、貧しさ（苦しみ）から自由でありますように」と祈願した。迦葉仏も、「檀家よ、望んだ願いはかなうであろう」といわれた。その商人は、家に帰ると、妻に話した。妻も喜び勇んで祝福の言葉を述べ、「生まれ変わるごとに一緒に生まれたい。涅槃をあなたと共に手にしたい」と祈願した。

その夜も更け、帝釈天は、ウイスチオン (withukyon, [Sk.]viśvakarman) 工芸天を派遣して、その商人の田に来て、深き九由旬の七階建ての、金の網で飾られた四棟の重閣をお作りになった。その商人は、その重閣の中で人間の幸福を享受して、死して、天界に生まれ、天の幸福を享受し、私たちの仏陀が仏とされた時、ピンサラ国においてザブパティ王として生まれ来たりた。フェルトを寄進したことがあったので、ルビーの靴を得た。閻浮提一帯を統治することができた。手斧を寄進したことがあったので、短剣を得た。針を寄進したことがあったので、矢を得た。善来比丘の阿羅漢となるであろうことを御覧になったので、「大王よ、来たれ、教えを私はよく説いた。苦しみに終わりをもたすために、尊き行いをなせ」とサッタン象の鼻にも似た右の手を伸ばして、お呼びになると、ザブパティ王と共に百一人の王たち、十万の大臣たちも全員、善来比丘の出家となった。

仏陀は、その出家たちに、無常の瞑想をお与えになった。そのすべての善来比丘たちは、皆阿羅漢となった。ザブパティ長老は、キンサナ王妃に対しても、息子のティリゴッタ (thirigutta, [P] Sirigutta) に対しても、それを知らせる言葉を伝え、それを聞くと、キンサナ王妃は、大臣たちの妻と共にやって来て、マーガ沙弥が道程を短縮したので、仏陀のもとにその当日至り、継母であるゴードミー阿羅漢のもとで出家し、皆女阿羅漢となった。

2. 事跡に関わるビルマ国内での言及

ビルマでは、一般に宝冠仏はザブパティ像として広く知られている。そして先にも触れたように、仏教美術や仏教文献史の中でも取り上げられ言及されている。以下に主要な議論を紹介し、この事跡の重要性と問題の所在を整理しておきたい。

(1) 宝冠仏の観点から

ウー・ミャは「ザブパティ像の誕生について」という論考で、宝冠仏はインド、ベンガル、ビハール地方において、パーラ王朝の時代に大乘、タントラ思想とともに出現したものの、とし、ビルマにおいても、全土、特にシャン（またラオス、タイ）に多く見つかっているとし、ビルマでは伝統的に仏陀像と弥勒仏、菩薩像とが区別されずにきた、として、

まず仏陀像としての宝冠仏と、菩薩像を区別する必要がある、とした上で、ザブパティ像はこのザブパティ王解脱の章の事跡をもとに生じた像であると区別して理解する必要があるとしている。またフィノ (Finot. L) が、モン語のザブパティ経があったとする、として、ビルマ語の事跡との関連も示唆している。この論考はビルマにおいて宝冠仏に関わるものとしてベースとなる議論を提出している [Mya 1961]。

またその議論をふまえ、タイソーは「ザブパティ解脱の章」と題したエッセイで、仏教が伝わったビルマ、タイ、ラオス、カンボジア各地でも、袈裟姿の仏陀像と王装束の仏陀像とが作られ、18世紀ビルマで編纂された『タターガタウダーナディーパニー』にあるザブパティ解脱の章、ラオス、タイで編纂されたザブパティ経が加わり、いわゆる宝冠仏の流れに合流した。ラオスのルワンパラバン市のウッパラオウウッ寺院の三蔵経庫の壁画にも、またカンボジア、タイにもザブパティと呼ばれる像があるとし、ビルマではバガン、インワ、ニャウンヤン時代を通じて造られたが、一般に人々はそれらのすべてをザブパティと呼ぶようになっている、としている [Taik 1985]。

他方で、サンターアウンは『古代アラカンの仏教美術』という英語の著書において「宝冠仏」の章を設け、ヤカイン州で見ついている宝冠仏は弥勒仏が持つべき特徴を持たないのであり、それらは仏陀像と考えられている、それは袈裟姿ではなく王の姿をとっているというのにすぎない、とし、大乘とも関わる転輪聖王が関係し、その特徴(王冠、イヤリング、ネックレス、腕輪、ブレスレット、足輪、腰紐)などを持つものもある。王冠、耳輪、ネックレス、首輪をつけた袈裟(右肩が出ている)姿のものもある。他方で八大図の仏陀像の中にも宝冠仏が見られる [San 1979: 60-71] とする。さらに、ヤカイン州においては、マハーチャイン (Mahakyain) 仏という呼び名もあり、即位式に重要な役割を果たした [San 1979: 66-69] としている。

これらの言及から、このザブパティ王の事跡以降、それまでの仏陀像(出家姿、王の姿)に加えて、ザブパティ像が作られるようになり、今日広く知られている、という理解があることがわかる。

(2) 仏教文献史の観点から

翻って、仏教文献史において、このザブパティ王の事跡は、ジンメーパンナータからのものであると認識されている点についても整理しておきたい。古くは、モンユエゼータウン尊師 (1768-1828) が、ジンメーパンナータからビルマ語仏教叙事詩ピョ作品になったものとして、九編を上げ、その中に「ザブパティ・ピョ」が含まれている [Monywe 1968: 419] としている。近年「ミャンマー文学におけるジンメーパンナータ」においてウー・キンエイは、ザブパティの事跡をジンメーの第26話とした。それは従来のウー・キンチーらの認識を踏襲したもの、つまりザブパティの事跡はウェプラーヤタキッティ (Wepullayathakitti, [P] Vipullarasakitti) である [Kye 1969 dha] という認識に基づいているが、今日見つかっているジンメーの第26話は、Vipullaであり [Jaini 1983:v], 実際には異なっている。つまりザブパティはジンメーであると認識されながらも、それを

含むヴァージョンはまだ見つかっていない。

この場合、筆者はジンメーの別のバージョンが存在する手がかりを得た。それは仏教書の広告に記された文言で、「ウェブラヤタキッティ、ザブパティを含むジンメーのビルマ語訳」というものであった〔原田 2007 : 21〕。実際この広告の原本はまだ出版されておらず、その現物をいずれの形でも目にしていないので、これが、一般的な認識に基づく文言なのか、実際に所収されている名前を引用したのかは確認できないが、ザブパティを含むジンメーの異なるバージョンが存在するという意味でもこの事跡は重要であろう。

(3) 諸王の王の観点から

さらに今ひとつ重要な点として浮かび上がるのは、諸王の王という捉え方であろう。ウー・ミヤは上掲論文において、ミンドン王（在位 1852-1878）の時代にも、古くはパドン王の時代 1810 年にも、王の装束をした仏陀像に対して、当時のサンガ主に根拠を尋ねている記述があり、そこでは次のような趣旨の解答があったという。モンユエゼータウン尊師の応答を引用するなら「大般涅槃経には、仏陀は王冠や首輪、プレスレットなど王家の装飾で自身を飾られているとは記されていない。しかし、仏陀は彼の説法を王の玉座から行った可能性があり、それを聴聞した者たちがあたかも王が教えを説いているという印象をもった。これがもとになり、宝冠（飾られた）仏像が生まれ信仰されるようになったのであろう」というものである⁷〔Monywe 1968 434-436〕。

これもまた宝冠仏に関わるビルマの伝統解釈と言え、ザブパティ以外の解釈として、またザブパティの事跡との関連も含め、重要な示唆を与えているように思われる。

終わりにかえて

宝冠仏はインドを中心とした仏教美術史において研究が蓄積されてきた⁸。しかしその意味については、定説がないように見受けられる⁹。ビルマにおける宝冠仏もその文脈で言及されることが多い。他方で東南アジアの仏像についての言及ではザブパティ像という名前こそ見られるが、その事跡の完結した典拠について言及されている例は、少なくともビルマ所伝という場合、見られなかったように思われる¹⁰。

他方でパンニャーサジャータカについては、近年仏教学の分野で研究が進められている¹¹。しかし、ビルマにおいてジンメー所収の一篇であるとされるこのテキストの存在は、同様に完結した形ではまだ知られていない。実際、現在見つまっているバージョンの中にそのストーリーは含まれていない。しかし異なるバージョンが存在しその中に所収されて

7 この部分はサンターアウンの要約を参照した。〔San 1979 : 62〕

8 〔高田 1954〕, 〔Y.Krishan 1971〕 〔宮治 1981, 1990〕 〔小野 1969〕 〔前田 2003〕 〔森 2001〕 など参照。

9 「精神的な世界における覇者である仏陀に、世俗の王のイメージを重ね合わせた」「寄進者による仏の供養・莊嚴を意図した」などが今日ある解釈とされる。〔森 2001 : 65〕

10 タイのザブパティについては〔Griswold 1961〕。

11 〔スキリング 2004〕 〔田辺 2004〕 〔茨田 2007〕 など。

いる可能性がある。

ビルマのみならず、東南アジア各地に見られる固有の宝冠仏信仰、及びそれに関わる経典という観点からも、今後この事跡を含め議論されることが望ましいように思われる。

文献

[テキスト]

Hirithaddhamabilankara Ashin. 1958, (171) Zabupati Min I Akyauung go Pyajin. *Tahtagata Udana Dipani*. Vol. 3. Hanthawaddy Pitakat Pohnheit Tait: 42-70

Zabupati Cut Hkan Wuthu Hsan, 1926

Yewata, Ashin *Zabupati Min Cut Hkan Tyadaw*

[引用, 参考文献]

Kyee Khin, U and Myint Swe, U. 1961 *Zimme Pannatha Nibat Wuthudawgyi haint Zimme Pannatha Sittan*. Myint Swe Publishing

Monywe Zetawun Hsayadaw 1968 *Thamanta Sekkhu Dipani*, Gandama saponhuneitaik

Mya, U. 1961 Zabupati Youpwa Hsintudaw Hpyitpawlajin Akyauung. *Shehaung Thutethana Nyunkyayewun i 1958-59 Hkunit Atwet Hnitcouth Asiyein Hkanza*. Yangon: 28-37

Taik Soe, 1985 Zabupati Cuthkan, *Dagon Meggazin* Vol. 1. No. 4: 20-22

A.B.Griswold. 1961. The Conversion of Jambupati, Notes on the Art of Siam, no.5., *Artibus Asiae*. Vol. 24. No. 3/4 (1961): 295-298

Khin Aye, U 2003 *Zimme Pannatha and Myanmar Literature*. Pricceeding paper in *Tradition and Knowledge in Southeast Asia*, Yangon

P.S.Jaini. 1983. *Paññasa-Jātaka or Zimme Paññasa*. Vol. 2. PTS

San Tha Aung 1979. *The Buddhist Art of Ancient Arakan (An Eastern Border State beyond India, east of Vanga and Samatata)*, Yangon

Y. Krishan. 1971. The Origin of the Crowned Buddha Image. *East and West* 21 (1-2): 91-96

小野勝年, 1969, 「宝冠仏試論」『龍谷大学論集』389: 279-299

高田修, 1954, 「宝冠仏の像について」『仏教芸術』21: 42-58

田辺和子研究代表 2004 『大谷大学所蔵貝葉写本 Paññasajātaka と他伝承の同名本との比較研究』(科研成果報告書)

原田正美, 2007 「Zimme Paññātha (Hanthawaddy 版と写本) 発見の経緯と若干の覚書」, 茨田通俊研究代表 『タイ所伝 Paññasajātaka の校訂, 翻訳と思想研究』: 19-30

ピーター・スキリング (畝部俊也訳) 2004 「東南アジアにおけるジャータカとパンニャーサジャータカ」 『真宗総合研究所研究紀要22』: 11-74

前田たつひこ, 2003, 「飾られた仏陀に関する一考察」『和光大学表現学部紀要』4: 159-173

茨田通俊研究代表, 2007, 『タイ所伝 Paññasajātaka の校訂, 翻訳と思想研究』(科研成果報告書)

宮治昭, 1981, 「バーミヤンの飾られた仏陀の系譜とその年代」『仏教芸術』137: 11-34

宮治昭, 1990, 「バーミヤン石窟の天井壁画の図像構成—弥勒菩薩・千仏・飾られた仏陀・涅槃図—」 『仏教芸術』191: 11-38

森雅秀, 2001, 『インド密教の仏たち』春秋社

(2008. 11. 27 受理)